『イエス・キリストに関する啓示』

じます。』と告白がなされた。彼が後向きに水中に入れられた時、彼は力強い腕が彼を支えているのを感じた。冷い水が彼の体全体を被った瞬間に、『私は、主イエスの御名によって、あなたに洗礼を施します。』という声が彼の耳元に聞えて来た。」

「主イエスの御名による洗礼」は、かくの如く、ローマ・カトリック教会が変更するまで、行われていた。聖書的方法は、ただ一つしかない。すべての使徒達は主イエスの御名によって回心者に洗礼を施した。確かに、教会員であることよりも、神の御言の真理を愛する人々も多くいる。「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」（ヨハネ伝８：３２）聖霊が真理を啓示するとき、サタンはその真理を押えることはできない。

「神は唯一である」

勿論、神が三人いるのならば、「一人の父、一人の御子、一人の聖霊」で洗礼を施してもよかろう。しかし、ヨハネに示された啓示は、「唯一の神、その名は主イエス・キリスト」であった。「唯一の神が存在し、唯一の洗礼」、これが聖書的公式である。この方法で、ペテロはペンテコステの日に洗礼を施した。「イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである。」（使徒行伝２：３６）と、ペテロは言った。

もしイエスが、「主でありキリスト」であり、また、「初めであり終り」であり、「アルパでありオメガ」であるならば（黙示録２２：１３、同書２１：６、及び黙示録１：８、１１、１７に述べられている）、イエスは、「父であり、御子であり、聖霊」である。何故ならば、エホバは、イザヤ書４８章１２節と４４章６節に於て、「わたしは初めであり、わたしは終りである。わたしのほかに神はない。」と言っているからである。再び、イザヤ書４４章２４節に於て、エホバは、「わたしは主である。わたしはよろずの物を造り、ただわたしだけが天をのべ、地をひらき」と述べ、更に、イザヤ書４６章９節では、「わたしは神である。わたしのほかに神はない。わたしは神である。わたしと等しい者はない。」と宣言している。然り、イエスは旧約のエホバの受肉である。

ある時、ピリポが主イエスに対して、「主よ、わたしに父を示して下さい。そうして下されば、わたしは満足します。」と尋ねたが、主イエス様の解答は、「ピリポよ、こんなに長くあなたがたと一緒にいるのに、わたしがわかっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのである。」（ヨハネ伝１４：９）であった。ある人々は、「それでは夫婦の様な関係ですね。」と言うかも知れないが、そういう意味での一体関係ではない。何故なら私達は夫に出合ったからと言って、その妻に出合ったのではないからである。イエス様は、「あなたがたが私を見るとき、あなたがたは父を見るのである。」と言われた。イエスは、唯一、真の神が受肉したお方であった。イエスは、人間のあいだを歩まれた神の幕屋であった。黙示録２１：３及びヨハネ伝１：１４。

私は、神の言は、矛盾なく、解釈できる点で、すべての人々が一致すると思う。神の言は、規則に規則、教訓に教訓と言う具合に集めて、調和させることができる。もしそういう調和が行われないとすれば、聖書に対する信仰は生れないであろう。聖書の一部が間違いで、他の部分が正しいと、一体、誰が判定できるだろうか。真理に対する愛をもつとき、私達は真理を発見することができる。

『イエス・キリストに関する啓示』

「キリストにある神」

「『その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。』これは、『神われらと共にいます』という意味である。」という、イザヤ書7書14節の御言及びマタイ伝1章23節の御言は、「旧約のエホバは新約のイエス・キリストである」ことを宣告している。いかなる努力をしても、三人の神々が居るなどという事は証明不可能である。ローマ・カトリック教会が、『三位一体』の教義を考え出したのであるが、聖書のどこを捜しても、『三位一体』という語は見い出しえない。

中世の暗黒時代を過ぎること 幾世紀にもなる今日に於ても、尚、この異教の教義が、今日の世界で信奉されている。

聖書の御言がかくも曲解されている今日に於て、『キリストにある神』の真理を理解するためには、聖霊による啓示が必要とされる。幸い、携挙に備えた教会は、啓示に基づいて建てられているので、携挙に備えている民はその心を開いて真理を受け入れることができると信じる。何故なら、聖書は、「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。」(ヨハネ伝16:13)と言っているからである。

「イエスの御名によるバプテスマ」

洗礼の施し方についての啓示は、実際、必要としないのである。初代教会に於てなされた洗礼の方法が聖書に明白に録されてあるからである。使徒達が誤って主イエス・キリストの命令から外れて、「父、御子、聖霊の名」によって洗礼を施したとでも言うのであろうかあるいは、故意に不従順に陥ったとでも言うのであろうか。私は、使徒達は今日の誰よりも主の御命令を理解していたと思う。使徒達は主が誰であるかを知っていた。主の御名を知っていた。聖書の中には、使徒達が主イエス・キリストの御名以外の方法で洗礼を施したという記録は、どこにもない。使徒行伝の教会は、行動する教会である。それ故、その当時彼らが主イエスの御名によって洗礼を施していたとすれば、今日もなお同じ方法で洗礼を施すべきである。使徒行伝19章1－6節で、使徒パウロは、エペソの信者達が別の方法で洗礼を受けていたので、再度洗礼を施している。ある人々は、何故ローマ・カトリック教会の考え出した公式を執拗に使用するのであろうか。ある人々は、「私はペテロの言葉よりもイエス様の言葉の方を選びたいのです。」といった。しかしイエスは、「わたしは父の名によってきた」(ヨハネ伝5:43)と言っている。天上にあり地上にある、すべての家族が主の御名によって呼ばれることが、エペソ書3章15節に録されている。「主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。」(ゼカリヤ書14:9)

雑誌『タイム』の1955年12月5日号は、紀元100年に於けるローマの洗礼に関する真実の記録を再録している。「執事が手を挙げると、パブリウス・デキウスが洗礼室の戸から入った。材木商人、マルクス・バスカが胸まで水の中に入った。彼はパブリウスが彼と共に水の中へ入ったとき微笑していた。『あなたは信じますか。』という質問に対して、『私は信じます。』という返答が返って来た。『私は、ポンテオ・ピラトのもとで十字架に付けられたイエス・キリストによって救われると信じます。私はキリストと共に死に、キリストと共に永遠の生命を得られることを信

神は真理を私達から隠そうとしているのではない。主は、「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ伝8:32)と言っている。真理は私達を縛るのではなく、私達を自由にする。真理に対する愛を失うとき、虚偽と誤りに陥る。テサロニケ後書2章10節及びイザヤ書66章2節。しかし、主は、「主の言葉に恐れおののく者」(イザヤ書66:2)を、顧みられる。

「永遠の神イエス・キリスト」

もし啓示が漠然として不明瞭であるならば、神を仰ぎ望み、神の助けを求めることができる。私達すべての者が真理を知る知識をえることが、神の御旨である。

再度、主は、「それゆえ、主を知ろうと求める者は、主を知るであろう。」と言われた。主が一体誰であるかを私達は知ることができる。人間を造り自由な意志を与えた神を離れ、故意に誤ちの道を選び神の裁きを受けるに到った人間を救うために、人間の姿をとり人間の身代りに人間の裁きを受けられた神を知ることは、なんとすばらしいことではないか。イエスは私達の罪を背負われ、私達はイエスの義を受け継いだ。かくして、神への道、永遠の生命への道が開かれた。

友よ、主が誰であるかを知ることは、非常に大切である。イエスは堕落した人類を贖うために受肉した永遠の神である。